

作業療法学科実習生が専門学校教員に望むことについての考察

和田義哉¹⁾ 辻村 肇^{2, 3)}

- 1) 学校法人大阪滋慶学園鳥取市医療看護専門学校教務部
- 2) びわこリハビリテーション専門職大学作業療法学科
- 3) 大阪電気通信大学医療健康科学部

Discussions on occupational therapy interns' requests for vocational school instructors

Yoshiya Wada¹⁾ Hajime Tsujimura^{2, 3)}

- 1) Education Department, Tottori Medical Nursing Vocational School
- 2) Department of Occupational Therapy, Faculty of Rehabilitation,
Biwako Professional University of Rehabilitation
- 3) Department of Medical and Health Sciences,
Osaka Electro-Communication University

要旨

本研究では、臨床実習を経験した学生が学校や教員に望むことについて、自由記述のアンケートに回答してもらった。実習別にその結果を分析すると、臨床実習 I では、「統合と解釈」の書き方を教えて欲しいという内容が多く、臨床実習 II では、ケースレポートの書き方に困っている学生が多かった。臨床実習 III では、治療や精神のことを教えて欲しいという意見が出るようになった。3 つの実習を通して多かったのが、「評価」に関することであった。臨床実習 I では初めて行う評価に戸惑いもあると思われるが、臨床実習 III においても評価の仕方に苦しむ学生がおり、学校側は臨床実習前に様々な事例を挙げて、評価の仕方を教えるようにするべきであると考えた。鳥取臨床科学 12(2), 88-93, 2020

Abstract

In the present study, we performed an open-ended questionnaire on students who underwent a clinical training to examine their wishes for the school and the instructors. The result was analyzed by the training (i.e., clinical training I, II, and III). In the clinical training I, how to write “integration and interpretation” was the common answer. In the clinical training II, many students were struggling with how to write case reports, and in the clinical

training III, they expressed their wishes to learn treatments and psychology. The most common answer throughout the three trainings was related to “assessment.” Students were confused regarding the very first assessment during the clinical training I, and some of them still continued to struggle with assessment during the clinical training III; thus, the school should instruct students in the method of assessment using various examples before the clinical training. Tottori J. Clin. Res. 12(2), 88-93, 2020

Key words: 作業療法学科, 臨床実習, 学生からの要望, テキストマイニング; occupational therapy department, clinical training, wishes from students, text mining

はじめに

臨床実習は、学内で学習した知識と技術、技能及び社会人、専門職としての態度を臨床における体験を通して活用、応用、統合することを学ぶ課程である。学生は臨床教育者の指導のもと、対象者の全体像の把握、評価、計画、治療、援助までを見学、模倣、実施の段階的体験を通して、療法士としての知識と技術・技能及び態度を身につけ、医療、福祉に関わる専門職としての認識を高めることを目的とする。そういう意味で、臨床実習は、療法士養成のカリキュラムにおいて重要で、将来医療従事者として適応できるか試される場でもある。

養成校でのカリキュラムは、療法士になるために必要な知識を享受するための授業が設定される。しかし、実際に実習を行った時、養成校で習わなかった事柄を要求されることがある。要求されたことが達成できなければストレスを感じ、臨床実習が療法士になる意欲を低減させるものにもなる。実際、和田ら¹⁾の調査でも、実習を経験した学生の作業療法士になる意欲が低下している。学校では実習をより有意義なものにしていくために、授業内外での実習のための対策を講じているが、実際に実習において必要なものとは何なのか。本研究では、学生が実習を経験した後、学校や教員に希望することについて

アンケートを取り分析を行った。

方法

被験者は A 専門学校作業療法士学科の学生（3 年課程）の 1～3 期生、合計 106 名であった。方法は、各臨床実習（臨床実習 I は 2 年次の 1～2 月の 5 週間、臨床実習 II は 3 年次の 5～7 月の 11 週間、臨床実習 III は 3 年次 8～10 月の 11 週間実施した）の終了時に、実習アンケートを実施した。その中に、「実習をより充実したものとするために、学校・教員に期待するものを理由とともにお聞かせください。」という質問項目を設定し、自由に記述させた。分析方法はテキストマイニングによる分析を行った。テキストマイニングとは、大量の文章データから有益な情報を取り出すことを総称したものである。このテキストマイニングを行う装置として KH Coder3 を使用した。なお、本研究に関して A 専門学校の倫理委員会にて承認を受けた。

結果

分析は、KH Coder3 を使用して、実習での学びについて自由に記述させた中で頻出する単語を調べることに依った。その結果、多かったのは、「実習」、「教える」、「評価」などであった（表 1）。次に、各臨床実習における特徴であ